

# 一般社団法人日本社会福祉学会 第 67 回秋季大会報告

日本社会福祉学会 第 67 回秋季大会 実行委員長 相澤 仁 (大分大学)

去る 9 月 21 日、国立大学としては初となる日本社会福祉学会第 67 回秋季大会を本学で開催することが出来ました。2 日間の開催を予定しておりましたが、台風の影響により理事会決定により一日のみの開催になってしまったことは私ども大会校としては時間をかけて準備してただけに残念です。実際の交通状況などを考えればこの決定は英断であったと考えております。しかしながら、悪天候が予想される中、また一日限りという日程という状況にもかかわらず、全国各地から、また韓国などからも多くの方々にご参加いただきましたことに感謝申し上げます。約 400 名の方々に参加して下さいました。誠にありがとうございました。

当初、2016 年度に新設したばかりの福祉健康科学部の数少ないスタッフが中心になって、大規模な大会を引き受け、運営することが出来るのか、かなり心配をしました。取りあえず学部内に廣野俊輔事務局長を中心に据えた実行委員会を立ち上げると共に、大会運営委員長である山縣文治先生をはじめとする運営委員会の先生方や学会事務局とご相談をさせていただきながら、多くの方のご協力により、どうにか開催することにこぎ着けました。

国は一億総活躍社会づくりを推進しており、福祉分野においても、「支え手側」と「受け手側」に分かれるのではなく、すべての地域住民が役割を担い、相互に支援しながら、その人らしく生き活きと生活できる地域コミュニティづくりを実施し、公的援助を活用しながら互いに助け合いつつ暮らすことのできる「地域共生社会」や「地方創生」の必要性が指摘されています。こうした動向を踏まえて、今回の大会のテーマは、「共生社会の構築に向けて～自立と多様性の共存」としました。私たちは、地域共生社会の根本を問うためにも、もう一度、「自立」や「共生」の意味を深く考えることが必要ではないかと考え、今回のテーマを設定しました。

したがって、大会校企画シンポジウムについては「自立は社会福祉の規範たり得るか～存在の多様性を支える論理とは」というテーマで、奥田知志 (NPO 法人抱樸代表)、杉野昭博 (首都大学東京)、山縣文治 (関西大学)、湯澤直美 (立教大学) 各氏をシンポジストとしてお迎えし、生活困窮者自立支援、障がい者福祉、子ども家庭福祉・子ども権利擁護、フェミニズム・ジェンダーというそれぞれの立場より所論を提供していただき、フロアからの質問を中心にしつつ、このテーマについて議論を深めることが出来たものと考えています。それぞれのシンポジストの報告が質の高いぎっしり詰まった内容であったこともあり、結果、多くの方々から示唆に富む内容であったという評価をいただくことができ、企画した大会校としてはほっと胸をなでおろす思いを抱くことができました。このテーマについては、極まりのない深甚なる課題ですので、これから先も考えていかなければならない課題です。このシンポジウムをきっかけに、議論を深めていただけたらと思っております。

また、本大会では、これまで会員の皆様の支持のもとに実施してきた「若手研究者のためのワークショップ」を「スタートアップ・ワークショップ」と名称を変更して開催いたしました。「若手・女性研究者に対する支援検討委員会」を中心に開催に向けた企画の検討が行わ

れ、本大会では、研究計画の立て方、研究申請書の書き方等、科研費を中心に競争的資金の獲得を目指した「社会福祉研究における研究費獲得に向けたワークショップ」をテーマに開催いたしました。具体的には、科研費申請書を中心とした助成金申請書の書き方のポイントについての講演後に、グループに分かれて、それぞれ自分の問題点を相談し相互に検討し合うワークを行い、良い申請書にするにはどうすればよいかなどについて議論しました。参加した会員からは有意義な内容であったとの評価でした。

また、この大会は、新しい取り組みを導入した大会でもありました。本大会から、2018年5月に「大会のあり方」検討委員会から提出された報告書に基づき、研究倫理の徹底を図るために、発表時に抄録以外の資料を配布する場合には、その報告者から「配布資料」を事前に提出してもらい、チェックを受けるしくみが導入されました。

会員からは管理や決定の根拠などこのしくみについての質問や意見がありました。こうした質問や意見などに対して、金子会長や山縣大会運営委員長の迅速な対応によって大きな混乱を生じさせることもなく、進めることができました。

本大会から見えてきた検討すべき今後の課題としては開催時期の問題です。9月は台風シーズンであり、このところ大型な台風による甚大なる災害などが起きています。今後もこのような状況が予想される中で、この時期に開催することしかできないのか、検討すべき課題であると感じました。

今回は一日のみの開催となり、大変ご迷惑をおかけいたしました。大会校としては一日であっても開催できたことは良かったと思っております。行き届かなかったことも多々あったものと思いますが、理事会や運営委員会の皆様をはじめ、ご協力いただいたシンポジストや全体統括者、報告者の方々、参加して下さいました会員の方々、準備から開催そして後始末までご尽力いただいた大会ヘルプデスク皆様のご協力や温かな心遣いに助けられ、なんとか無事終了することが出来たものと考えております。開催校としてスタッフ一同、心より感謝申し上げます。

大会長である北野学長が、このようなイレギュラーなことのあった大会は忘れることのできない大会になると挨拶の中で申していましたが、皆様方にとって何か得るものがあった大会であったとしたら幸いです。ありがとうございました。